

プロダクションノート／PRODUCTION NOTES

◆クランクイン◆

2017年1月28日早朝、底冷えのする生田緑地。主人公役の平山恵一さん、岡本望来さん、柿沼矩子さん、かなでちゃんとパパがクランクイン。岡本太郎美術館やメタセコイアの林、中央広場などで撮影。

◆のどかな田園風景で撮影◆

川崎市内では珍しい田園風景が広がる麻生区の早野で、走るシーンを撮影。

◆川崎が誇るオシャレスポットで撮影◆

映画やショッピングなど多くのお客さんで賑わう「ラッタデッラ」で、山本翔太さんがブレイクダンスを踊るシーンを撮影。

◆小学校で撮影◆

1月29日早朝、中野島小学校から撮影開始。金子遥夏さんは自前のバイオリンを携えて撮影。

◆全国から注目を集める「住みたい街」で撮影◆

2日目の1月29日は、武蔵小杉駅前通り商店街から撮

影スタート。冒頭の主人公が道に迷い、WHILLに乗った少女と出会うシーンや、川崎市認知症ネットワークの皆さんによる体操シーンなどを撮影。

◆由緒ある神社で撮影◆

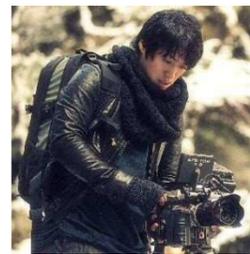
丸子山王日枝神社で、COGYに乗った男性（Fabio Y.Kさん）や芋煮を振る舞う男女（内田唯さん、林万裕美さん）が登場するシーンを撮影。

◆クランクアップ◆

等々力陸上競技場前と多摩川河川敷で撮影。2016年のRUN 伴に参加した市内外の皆さんにも集まっていたが、ラストシーンを撮影。納得行く映像が取れるまで何度もテイクを重ねる監督。そして日没間際、ついに2日間にわたる撮影が終了。



監督／DIRECTOR



田村祥宏

(株式会社イグジットフィルム)

本作は、キャストだけに留まらず、役所の方や一般の市民の方々、我々撮影スタッフまで、本当に様々な個性を持った人々が、

自分事として主体的に関わり、そして互いを仲間としてリスペクトしながら作り上げました。川崎市の多様性を認める文化がこれから何を作っていくのか、何を育んでいくのか、楽しみでなりません。

撮影クルー／CREW

<DIRECTOR / CINEMATOGRAPHER / EDITOR>

田村祥宏 (EXIT FILM inc.)

<ASSISTANT DIRECTOR>

西澤英樹 (EXIT FILM inc.)

<COMPOSER>

柿本直 ([.que])

<STYLIST / MAKEUP ARTIST>

クワモトカツヒコ

<GAFFER>

稲葉俊充 松永太郎邦継 平野礼

撮影協力／COOPERATION FOR SHOOTING

武蔵小杉駅前通り商店街振興組合／コアパーク管理運営協議会／生田緑地／川崎市岡本太郎美術館／中野島小学校／株式会社チッタ エンタテインメント／丸子山王日枝神社／等々力陸上競技場／川崎市認知症ネットワーク／社会福祉法人はぐるまの会／川崎市外国人市民代表者会議／RUN 伴川崎プロジェクト実行委員会／WHILL 株式会社／株式会社 TESS／一般社団法人認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ／特定非営利活動法人認知症フレンドシップクラブ

COLORS

YouTube「川崎市チャンネル」で検索

川崎市経済労働局次世代産業推進室 TEL/044-200-3226

川崎市健康福祉局地域包括ケア推進室 TEL/044-200-2470

川崎市総務企画局シティプロモーション推進室 TEL/044-200-2273



イントロダクション／INTRODUCTION

団塊の世代が75歳に到達する2025年に向けて、地域包括ケアシステムの構築が求められており、川崎市では「誰もが住み慣れた地域や自ら望む場で安心して暮らし続けることのできる地域の実現」を目指して取り組みを推進しています。そのような中で、2025年の地域社会像を具体的にイメージできるよう、この映像企画を進めてきました。

この映像の中には、産業と福祉の融合で新たな活力と社会的価値を創造するウェルフェアイノベーションの取組として、2025年の社会像に、障害のある人もない人も含め多様な人が混ざり合いながら、車いすが生活

の中の楽しみを引き出す新しいモビリティとして、日常生活の中で活用されているシーンも描き出されています。

川崎市は、「Colors, Future!いろいろって未来。」と多彩な魅力と都市の将来像をブランドメッセージとして策定しましたが、ロケ地にも市内の魅力ある場面を多数採用させていただきました。この映像を通して、人もまちもモノも多彩な魅力があふれ、「混ざり合い、支えあい、活躍する」2025年の将来像が現実化していくことに一歩ずつ歩みを進めていきたいと考えています。

ストーリー／STORY

2025年、高齢者の5人に1人が認知症の社会で

認知症の人もそうでない人も、みんなでタスキをつなぐイベント「RUN TOMO-RRROW (通称 RUN 伴)」に、ある若年性認知症の男性が参加していた。彼は、途中で仲間とはぐれ、道に迷ってしまう。そこに、電動車いすに乗った少女が現れる。彼女にいざなわれ、彼は再び走り出す。

川崎市内を駆け巡りながら、男性と少女は様々な人々と出会う。公園で体操をしているアクティブシニア、公園で遊んでいる親子、バイオリンを弾いている少女、ブレイクダンスをしている男性、足こぎ車いすに乗っている男性、そして神社で芋煮を振る舞っている男女。彼らと一緒に、男性はゴールを目指す――。



出演者／CAST



RUN 伴の途中で道に迷った男性

平山恵一

——完成した映像をご覧になった感想をお願いします。
映像がとても綺麗ですね。色々な人と一緒に走っているところが面白いです。

——最初に出演依頼があったときはどう思われましたか？

昔から好奇心が強いほうですし、制作の目的も素晴らしいかったので、ぜひやってみようと思いました。

——撮影で印象に残っていることはありますか？

一番印象に残っているのは、最後の多摩川のシーンです。RUN 伴の皆さんが寒い中待っていてくれたのが嬉しかったです。また、撮影で訪れた早野（麻生区）には、働いていたときによく行ったので、懐かしかったです。

——平山さんが考える 2025 年はどんな社会ですか？

いろいろって未来。あなたが考える 2025 年。そんな社会を実現するために、あなたはどんなアクションをしますか？
（もしくは撮影の感想を教えてください。）



そして、そんな社会を実現するために平山さんがとりた
いアクションは？

病気を持っていると周囲の皆さんに助けをいただくことが多いですが、認知症があっても誰かの役に立てる社会になってほしいですし、自分もそうありたいと思います。
——認知症の診断を受けて、社会と関わることに抵抗を感じていらっしゃる方々もいらっしゃいます。そのような方々にメッセージをいただけますか？

私は週 3 回、就労支援事業所に通っています。職員の方から「平山さんが入ってくれたおかげで若い利用者が礼儀正しくなった」と言われ、嬉しかったです。必ず自分を必要としている人がいるはずですし、家に閉じこもっていると落ち込んでしまうので、勇気を持って一歩を踏み出してほしいと思います。

アクティブシニア

柿沼矩子／川崎市認知症ネットワーク

高度成長期の日本を支えた川崎市のように、いつも明日に向かって駆け抜けてきた私たちシニア世代、2025 年頃はどのようにしているかしら？ 平山さんから素敵な笑顔をもたらしたように、いろいろな人との出会いから、きっと新しい風が！ ゆっくりペースのシニアですが、街に出て、人々との交流を楽しみ、笑顔でこたえられる社会人になりたいですね。

ゴールで待つ人々

RUN 伴参加者の皆さん

住み慣れた地域の中で、私なりの人生を、自分の弱さを隠さずに過していきます。いくつになっても、色々な人と知り合い、共感し、時には助けて、時には助けられて、自分の楽しみを大事に、まわりの笑顔を喜びと感じ生きていきます。（代表・萩原利昌）



WHILL に乗った少女

岡本望来

撮影を通じて私が知らない川崎に訪れることができました。また、撮影で笑顔が作れなくて大変でした。今、小学 5 年生の私。20 歳になって大人の仲間入りをする 2025 年。撮影での気づきを忘れずに、色々な人に優しくできる大人になります。



バイオリンを弾く少女

金子遥夏

色々な人と色々な形で関わりあいながら、特別なことをするなど身構えず、困っている人、助けが必要な人がいることに気づいた時に、ごく当たり前に、自然に寄り添うことができるような人になりたいです。



芋煮を振る舞う男女

内田唯幸／林万裕美

（社会福祉法人はぐるまの会）

撮影では、衣装合わせとヘアメイクをしてもらった時には緊張をしたけれど、はぐるま農園産の里芋と長ネギがたくさん入った芋煮をみんなに「美味しい」と食べてもらえてうれしかったのと、みんなで多摩川を走ったのが楽しかったです！

2025 年、日常の街中で楽しみながら、思わず乗りたくなるパーソナルモビリティ

次世代型電動車いす

WHILL

「100m 先のコンビニに行くのをあきらめる」一人の車いすユーザーのこんな言葉から WHILL の開発は始まりました。100m というわずかな距離を移動する際にも、社会的な不安や物理的なリスクを感じている人がいる。スマートで機能的なモビリティがあれば、その人らしく、行動範囲を広げられるのでは。そんな思いから開発は始まりました。私たちが作りたいのは電動車いすではありません。車いすユーザーの人も、そうでない人も乗ることができる、乗ってみたいと思える、まったくあたらしいカテゴリーの「パーソナルモビリティ」です。



公園で遊ぶ親子

かなで&パパ

子育てや介護など、自分や家族だけではどうにもならない時に、SOS を出せる社会。そして、その SOS を受け止められる社会。地域と関わりながら、何が足りなくて必要かを想像力を逞しくしながら具体的に考えていきたいです。



ブレイクダンサー

山本翔太

ダンサー、bboy として、川崎を中心にこの素晴らしいカルチャーが世界中に広まるような革命が起きることが目標。このダンスには人をポジティブにする力があるので、まずは自分の周りの人から支え合って、大きな渦を作れたら嬉しいです。



COGY に乗った男性

Fabio Y.K

（川崎市外国人市民代表者会議）

人生初の撮影のお仕事を頂き、テレビから見るとあっと言う間のものですが、こんなに沢山のひとと沢山の時間で構成されているんだと驚きました。人と人を結びと絆が生まれる、そんな絆で未来の社会を変える。この考えを広げる事をやりたいです。

あきらめない人の車いす

COGY

足がご不自由な方が、自分の足でこぐ、世界初の車いすです。歩行が難しい方でも、どちらかの足が少しでも動かせれば、自分の両足でペダルをこげる可能性があります。人が歩行するときは、脳からの信号が脊髄を介し足を動かしています。しかし、足が不自由な方は、脳からの指令がうまく足に伝わりません。COGY に乗った方の足が動くのは、脳からの指令ではなく、右足を動かしたあとは左足という反射的な指令が、脊髄の「原始的歩行中枢」からでていると考えられます。つまり、片方の足がわずかでも動けば、反射的な指令によって、もう片方の麻痺していた足が動くというわけです。

